

# 明治八年における島津家墓所改修の断片

黒川 忠 広

## はじめに

鹿児島県内には、中近世の墓所が数多く残されている。墓所は、様々な石造物などによって構成されており、各時期の石造物研究に欠くことの出来ない場所でもある。だが、今日の姿が、造営当時の様子と同一でないことは周知のとおりでありつつも、時として忘却の彼方に置かれてしまう場合も散見される。例えば、墓石と石燈籠の組み合わせ一つ取っても、年代差や形態の異なる複数の石燈籠が墓石前に整然と並べられている事例など、墓所造営後の改変した結果が今の姿であるものも少なくない。これは、祖先祭祀の結果であり、その行為そのものは必ずしも問題とはならない。問題は、如何にしてこの履歴を正しく記録し後世へ残していくかである。

さて、筆者は、平成三十年度企画展において祖先祭祀に関係すると思われる玉里島津家資料を見出す機会を得た。企画展時には、この資料についての背景や具体的な現地検証など十分掘り下げることが出来なかった。小稿では、これを改めて考察し、明治初期における墓所改変の様相について文書類と石造物から明らかにすることを目的としたい。

## 一 墓所に関する先行研究

鹿児島県内各地に残る島津家墓所に関する研究は、地元郷土史において紹介

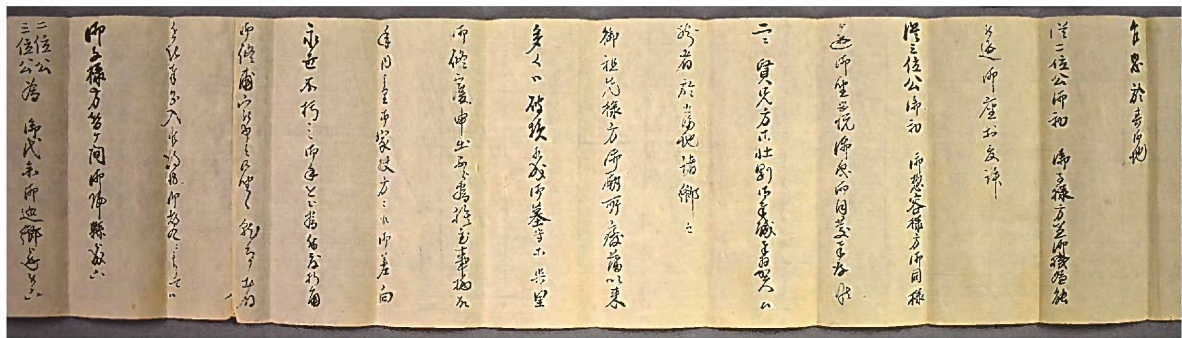
されるとともに、墓石を中心とした石造物の研究や、祖先祭祀等の研究において取り上げられてきた。石造物に関しては、南九州石塔研究会の果たした役割が大きく、その対象は島津家墓所に限らず多岐にわたっている。また、各地の郷土史家によっても同様で、身近な研究材料ともなっている。島津修久氏は島津歴代略記をまとめるに際して、墓地の一覧表を提示し、改修された墓所も含めて島津家墓所を網羅的に紹介した（島津一九八五）。田村省三氏は島津本宗家の祭祀すべき範囲を示した『御祭祀提要』を紹介し（田村一九九一）、両者の作業によって島津本宗家墓所の全容は明確になっている。両氏の論考をベースに、福昌寺跡の調査を担当した藤井大祐氏は、発掘調査報告書の中でより詳細に各地の墓所を紹介している（藤井二〇一七）。

近年では、鹿児島市・指宿市・始良市・垂水市・さつま町において島津家墓所に関する調査が進められ、文献と発掘の両調査によって墓域の変遷や付帯施設等の検討、石造物の形態分類や石材調査など多岐にわたる項目が整理された。

## 二 玉里島津家資料

今回紹介する墓所及び石造物に関連する史料は、『鹿児島県史料 玉里島津家史料八』に掲載されている二五三六号明治八年「鹿児島磯邸家令ヨリ東京桜出邸家令家扶へ 島津家祖先廟所修覆ニ付悦之助君帰県巡郷代参ノ件」である。以下、引用したい。

乍恐於其御地從二位公御初 御子様方益御機嫌能被遊御座、於爰許



第1図 2536号文書玉里島津家資料(部分)

從三位公御初 御物容様方御同様被遊御座、恐悅御儀御同慶奉存候、

二二賢兄方御壯剛御奉職奉拜賀候、然は於当地諸郷々御祖先様方御廟所廢藩以來、多くハ破損相成御墓守等より御修復覆申出不被為捨置事柄故、手内より御家扶方々江御差向、永世不朽之御手を被為付度、折角御修甫最中二御座候、就而は近比奉恐入候得共、御都合二よりてハ御子様方暫ケ間御帰県被成下

二位公  
三位公  
為 御代參御巡郷被遊被下、

彼是御直御下知等も被遊被下候儀共御座候得は誠ニ以難有、殊ニ廢藩以來世態變遷之次第、且左府公御事ハ御家未曾有御任官被為家 仰候御慶事等、旁以尊靈江被為告度儀共、何様可有御座哉、左候へハ兼而御尊敬之御趣意も被為貫、当時人心正道ニ仰導き候折柄、相応人氣とも關係シ人々感服イタシ可申、逐熟評候形行御懇談申上越候、万々一至当之筋ニも相叶候ハ、誠ニ以乍恐

從二位公思召之程御伺被下度、於爰元も同様奉伺度、左候而悅之助様御帰県共被遊被下候御都合御座候ハ、其序御湯療等も被遊候得は、御病後御保養ニも可被

為成哉、併左府公御建白之御続も御都合向ニよりてハ一日茂御膝下難被為離御事共、旁以一先賢兄方御賢慮相窺度、此旨  
意奉得貴意候、敬白

御家令  
二月廿五日  
御家扶

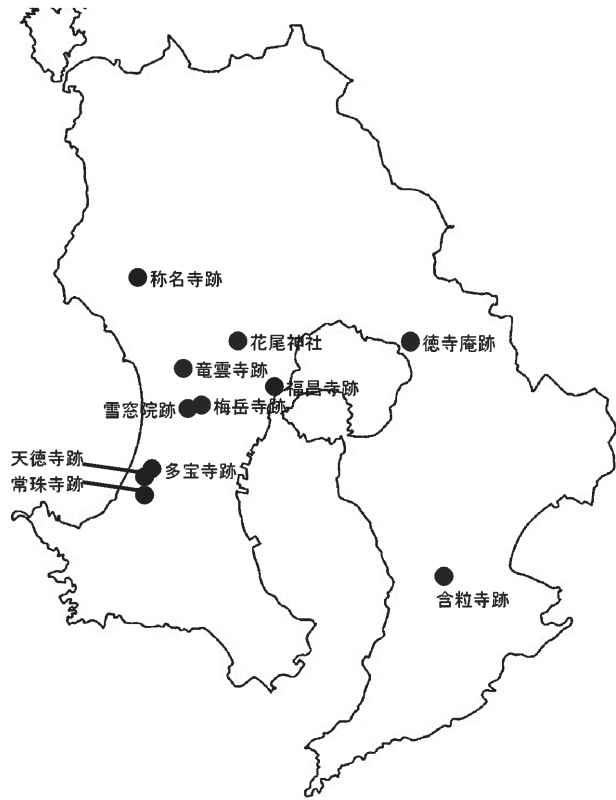
兩御邸御詰  
御家令  
御家扶

### 三 明治八年記銘の石造物

ここでは、史料中にある「御修甫最中二御座候」に注目し、明治八年の記銘が残されているか<sup>(1)</sup>、若しくはその可能性が考えられる墓所等について、筆者が知り得た限りを以下に紹介していく。

#### (一) 青峰山天徳寺跡

伊作島津家墓所である。建保元(一二一三)年に東福寺として創建された。伊作家三代親忠ほか総計五基の五輪塔が基壇上に密接に配置されている。右から島津本宗家五代当主貞久、貞久夫人、親忠、忠氏、久氏と伝えられる。この基壇入口の階段右手に手水鉢が一基あり、八角形の竿部に「献納 明治八年乙亥四月七日 伊作士族中」と記されている。墓所に対しての献納と言えよう。明治期以降に記された墓地図では、墓守宅も記されており、祭祀が継続されていた様子が窺える。



第2図 墓所及び石造物位置図

(二) 仏母山多宝寺跡

伊作島津家墓所である。伊作家四代久義により明徳元(一三九〇)年に現在の場所に移された。昭和十四(一九三九)年に善勝寺跡から八代久逸墓を、西福寺跡から常磐御前墓を多宝寺跡に改葬されている。墓所は、下段の第一墓地と上段の第二墓地(註)とに大別される。第一墓地には初代・二代・四・七代・九代が、第二墓地には八代久逸・常磐御前・御西墓がある。第一墓地の基壇には、入口が二カ所あり、左側入口の右手に八角形の竿を有する手水鉢があり、第二墓地には、久逸墓と常磐御前墓入口の左右に、八角形の竿を有する手水鉢があり、いずれも「献納 明治八年乙亥四月七日 伊作士族中」と記銘されている。

(三) 太平山常珠寺跡

相州家初代友久(一四三二〜一四九三)の菩提寺である。後に、相州島津家の墓地として、基壇上に山川石製の宝篋印塔十一基が残されている。石柵がめぐり、階段が中央に設置され、その右側手前に手水鉢がある。手水鉢には、「明治八年 戸長役所 三月吉日」と記されている。墓所に対しての献納である。

(四) 貴久夫人墓

十五代当主島津貴久夫人の菩提寺である日置市伊集院町の雪窓院跡にあったものを昭和三(一九二八)年六月十三日に福昌寺跡へ改葬したものである。全体的に風化が進んでいるが、二基の竿部が残されている。一つは四角形の竿部に、「(欠損)年乙亥七月一日 石工頭山口(以下風化により解読できず) 和出正章 西田恒行」とある。もう一つは、八角形で、「□□八□乙□七月一日」とある。なお、福昌寺跡と雪窓院跡には、この竿部の上部構造となるものは見当たらなかった。この二基の文字を相互に補完して解釈すると、雪窓院跡から墓石と共に移設された、明治八年七月一日献燈・献納の石造物であると捉えておきたい。

(五) 福寿山梅岳寺跡

十五代当主島津貴久の父島津忠良によって天文年間に創建され、忠良夫人「寛庭芳宥大姉」の墓所となった。基壇・石柵を有し、石柵に囲まれた中に石廟が一基、右手前に燈籠が一基ある。石廟の内部主体は五輪塔かと思われる。基壇へ続く階段の左右に手水鉢があり、いずれも竿部が八角形で、右は「明治八年乙亥七月九日」、左は「明治十五年十一月九日」の年月日が刻まれている。右の手水鉢には、「石工主取池出善八 木村貞助 櫻井吉之助 上村吉之助」の名前が見える。基壇内には燈籠が一基あり、「献納 和出正章 西田恒行 石工頭山口角次郎」の名前が見える。



①多宝寺跡 第1墓地全景



②手水鉢碑文 左側面



③手水鉢碑文 右側面



④多宝寺跡 第2墓地全景



⑤手水鉢左碑文 左側面



⑥手水鉢右碑文 右側面



⑦多宝寺跡 第2墓地手水鉢



⑧手水鉢右碑文 左側面



⑨手水鉢右碑文 右側面



⑩天徳寺跡 墓所全景



⑪手水鉢碑文 左側面



⑫手水鉢碑文 右側面

第3図 墓所及び石造物写真1

(六) 島津立久墓

① 竜雲寺跡

島津立久は十代当主で、文明六(一四七四)年に没し、本人の遺言により当地に埋葬された。基壇上に石廟が残されているが、内部に墓石は存在しない。石柵で囲まれた基壇内手前左右に石燈籠が配置され、そのうちの右側の燈籠に「明治八年乙亥七月一日 山口角次郎」とある。なお、筆者が現地を訪れた際、燈籠は横倒しの状態であり、設置している面の碑文を確認することができなかった。また、正面階段下右に手水鉢がある。手水鉢には裏面以外の三面に碑文が刻まれる。「明治八年乙亥九月」とあり、「上床國治、土橋兼記、臼井常明」の名が記されている。

なお、尚古集成館所蔵の墓所図面には、明治二十九年四月二日の記録として、石柵内部に石廟の他に四基の燈籠が描かれ、石柵外に手水鉢が描かれている。

② 福昌寺跡

石廟内の墓石のみが福昌寺跡に移設された。墓石は、「基礎の一面において平滑に削る加工を確認できる」として「宝篋印塔を廟の内部主体として設置するためのものであったと考える」と報告書でまとめられている(藤井二〇一七)。その前面には上部構造不明の竿部が残されており、「奉寄進 明治八年亥六月 士族中」と記されている。これは、昭和三年五月三十日に竜雲寺跡から墓石と共に移設されたと考えられる。

(七) 花尾神社

① 丹後の局茶毘所

丹後の局は、初代当主島津忠久の母である。茶毘所は、尖頭角柱形碑を中央に配し、基壇・石柵を廻らせる。茶毘の碑裏面に、「明治八年乙亥七月廿日修造」とある。左右に燈籠が一基ずつあり、共に「明治八年乙亥七月廿日」と刻まれる。右には「和田正章 西田恒行 石工頭山口角次郎」とある。一方左は、「石

工主取池田善八 石工新保金之助 鍋倉源太郎 木村貞助 池田彦次郎 櫻井吉之助 上村吉之助 新保権兵衛」とある。

② 丹後の局墓

墓域入り口右側に竿部が八角形の手水鉢があり、茶毘所と同様に「明治八年乙亥七月廿日」と「石工主取池田善八 石工木村貞助 新保金之助 鍋倉源太郎 櫻井吉之助 池田彦次郎 上村吉之助 新保権兵衛」の銘がある。

(八) 徳持庵跡

十六代当主島津義久の分骨が金襴の袋に納められていた寺は、廃仏毀釈によって廃寺となっていた。その跡地に分骨を納め墓所とした。島津家では、明治二年の忠義夫人暉子の葬儀以降、葬送儀礼を仏式から神式へと改めているため、宝篋印塔は用いられず、尖頭角柱形墓碑で墓碑銘も神号である。「明治八年八月日」(日付が省かれている)と記された燈籠が二基、手水鉢一基が確認される。燈籠二基は、全体の形状が福昌寺燈籠分類B類であり、屋蓋に轡十字の家紋を有する点はA類のバリエーションであろうか。竿部は節を有し、ここに猷灯の年月が、六面基礎に人名が刻まれている。右燈籠に「折田正介 新納台介」、左燈籠に「鮫島助二 山元角助 山内甚右エ門 有馬休蔵」と計六名の人名が見られる。手水鉢は、長方形の箱形で直線的な脚部を二足有し、福昌寺跡分類のA類に属する。その脚部左右外側面に、左側面に「明治八年乙亥八月日 田中直左エ門 山下新蔵 上村嘉平次 鍋倉源四郎 末野新之丞」、右側面に「村山勇太郎 是枝直太朗 山田盛二 野元仁之助 末野甚助 田中喜太郎」とある。なお、後述するが、基壇や石柵も含め、新規に製作されたと考えられる点<sub>が</sub>他の墓所の改変とは異なっている。

(九) 島津師久墓

六代薩摩国守護識である。永和二(二三七六)年に薩摩川内市碓山城にて



①常珠寺跡 墓所全景



②手水鉢碑文 左側面



③手水鉢 正面



④貴久夫人墓 (福昌寺跡) 全景



⑤四角形羊部碑文 (3面)



⑥八角形羊部碑文



⑦梅丘寺跡 墓所 (忠良夫人墓) 全景



⑧燈籠碑文 (2面)



⑨手水鉢右碑文 (5面)



⑩竜雲寺跡 墓所全景



⑪手水鉢碑文 (3面)



⑫燈籠碑文 (2面)



⑬羊部碑文 (福昌寺跡)

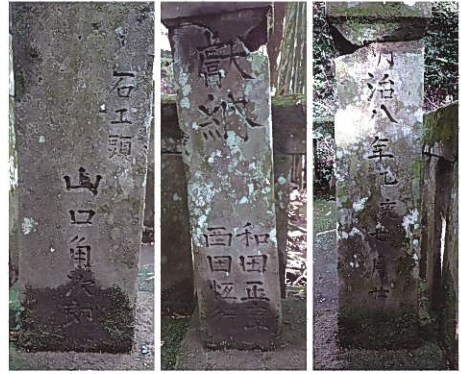
第4図 墓所及び石造物写真2



①花尾神社 丹後の局茶毘所全景



②茶毘所石塔裏面



③燈籠右碑文（3面）



④燈籠左碑文（4面）



⑤丹後の局墓手水鉢碑文（5面）



⑥徳持庵跡 墓所全景



⑦燈籠右碑文



⑧燈籠左碑文



⑨手水鉢碑文 左側面



⑩師久墓（福昌寺跡）近景



⑪燈籠碑文（3面）

第5図 墓所及び石造物写真3

没した。墓石は福昌寺跡に残されているが、薩摩川内市称名寺跡から昭和三(一九二八)年五月三十日に改葬されたものである。山川石製の竿部を有する燈籠が基壇前に見られる。碑文は「奉納 石工主取池田善八 新保金之助 鍋倉源太郎 池田彦次郎 新保権兵衛 明治八年乙亥六月二十日」とある。組み合わせが正しいとするならば、称名寺跡の墓所にも修覆が実施されていたことを示す石造物となる。

#### (十) 福昌寺跡

手水鉢が一基ある。「明治八年七月廿日 折田正介 新納台介」が確認できる。この兩名は、徳持庵跡の義久墓に見られる人物である。現在の位置から献納先は、七代当主元久夫人となっている。元久夫人墓は、鹿屋市吾平町含粒寺跡から改葬されており、兩名が吾平と国分とで作業を従事したのであろうか。この点は、今回は保留するが義久の後夫人である円信院殿實溪妙運大姉墓が、国分鳥越御墓より福昌寺跡へ改葬されていることから、實溪妙運大姉墓が本来の献納先であった可能性も否定はできない。なお、鳥越御墓と呼ばれる霧島市国分の遠寿寺跡には、明治八年記銘の石造物を確認することは出来なかった。

#### 四 明治八年墓所修覆の実態

島津本宗家は、「伊作島津家と相州島津家を継承した島津忠良の子貴久が島津本宗家の第十五代」であり(田村一九九一)、両家の祭祀も相続している。その対象は、鹿児島県をはじめ南九州一帯に広がっている。尚古集成館には、これら各地の墓所図が保管されている<sup>3)</sup>。この中には、御墓守役宅絵図があり、管理者を定めて維持管理がなされていたようであり、墓所と墓守役宅の位置関係も読み取ることが出来る。なお、これらの多くには、作成年月日が記されて

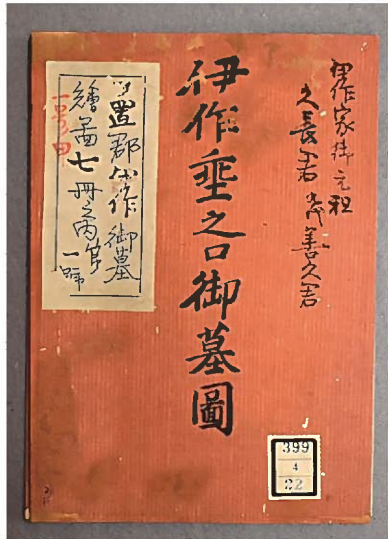
いない。だが、明治八年碑文の石造物も描かれていることから、少なくともこれ以降の記録と思われる。では、明治八年以前はどのような実態であったのか。明治八年二月の文書にある「諸郷々」の墓所修覆について考察していきたい。

まず、事業の完成形について見ていきたい。これを知る手掛かりは、徳庵寺跡の島津義久墓にあると考えられる。前述したが、この墓所は明治八年の新規造営である。他の墓所が、改変前の状況を示す資料が少ない中、事業の完成形を見ることが出来るといえよう。つまり、墓所として目指した姿は、維持管理の範囲を明確にするために区画し、基壇を用いて周辺の土地より高くして墓碑を含めた基壇を石柵で囲む。さらに、燈籠と手水鉢もしくはそのいずれかを献納ないし献納するという様式が窺える。

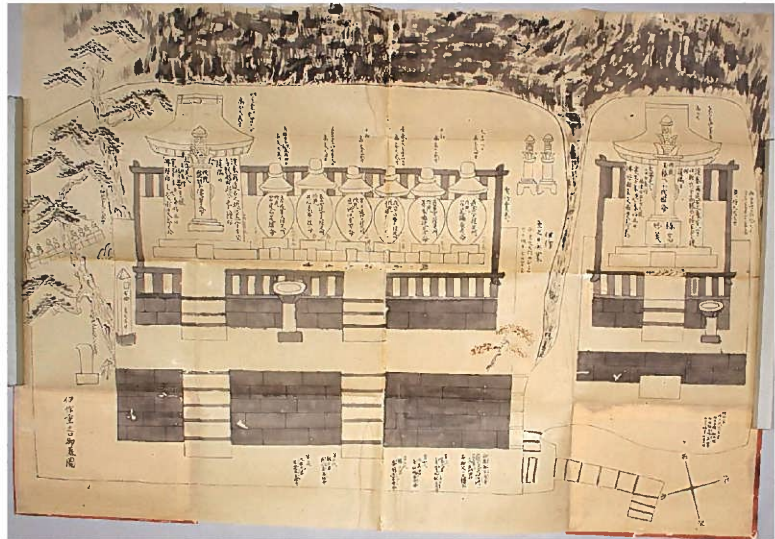
次に、献燈は、実施主体と考えられる島津家ではなく作業従事者と考えられる石工たちやその土地の関係者などが含まれている点が注目される。手水鉢献納は、島津本宗家墓所の手水鉢で人名が確認できる場合、親族ではなく家臣である場合が多く、一基あたりに記す人数も燈籠以上となる傾向が窺える。設置する場所は、石柵の外側へ配置される。即ち、墓域に対して献納される形を採る。手水鉢の形状に関しては、「一石造りのものと、鉢部と基礎からなるもの」に大別され、「前者をA類、後者をB類」とした福昌寺跡の石造物分類と大差がないため、この分類を踏襲したいが、今回の作業では形状の違いによる差異は見いだせなかった。なお、尚古集成館所蔵の『伊作垂之口御墓図』では、多宝寺第一墓地と第二墓地に手水鉢は各一基ずつあり、この図に久逸と常磐御前墓が記されていない。このため、これは両者が改葬される前の昭和十四(一九二九)年以前の姿であり、そうなる図に描かれている御西墓の手水鉢が見当たらない。いずれかの墓と組み合わせる手水鉢が少なくとも一基は失われた可能性を指摘しておきたい。

ここからは、墓所修覆に関わった人々について述べていきたい。前節で紹介たように、明治八年に島津本宗家は各地に残る本宗家が祭祀を引き継いだ墓所

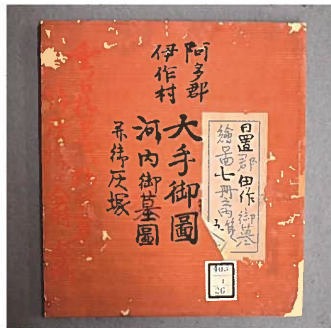




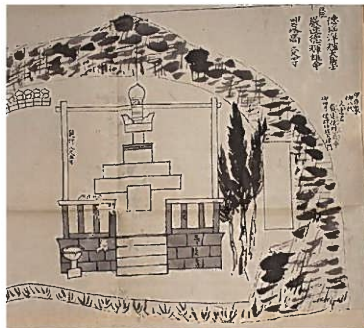
①伊作垂之口御墓圖 (表紙)



②伊作垂之口御墓圖



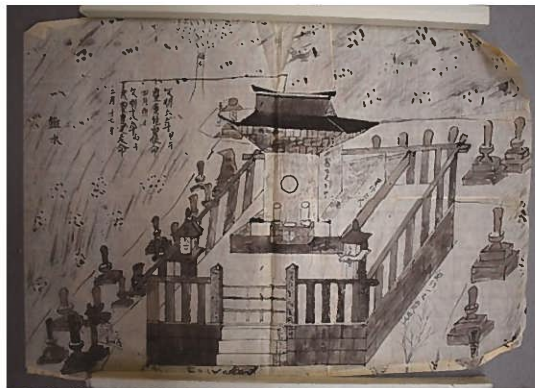
③大手御圖河内御墓圖并御灰塚 (表紙)



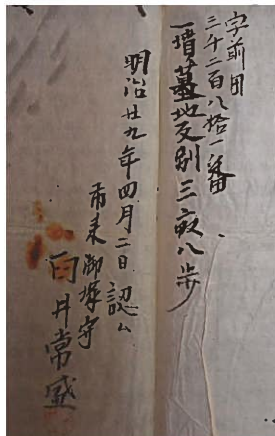
④大手御圖河内御墓圖并御灰塚 (久逸墓：部分)



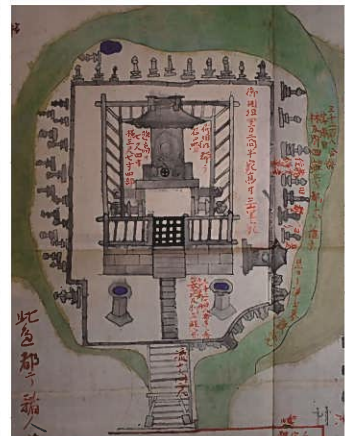
⑤大手御圖河内御墓圖并御灰塚 (常磐御前墓：部分)



⑥長里御墓



⑦長里御墓⑥の拡大



⑧長里御墓 (上：表紙、下：墓所図部分)

第6図 尚古集成館所蔵 島津家墓所関係図面類

に対して、修復事業を展開している。手水鉢や石燈籠などの石造物には関係者の記銘が残されている。この記銘から、作業には、伊作士族中や士族中とあるように、地元の人々が深く関わったことが推察されよう。田布施の場合は、戸長と記されていることから、現在で言うところの行政機関主導による作業も考えられる。これらを、筆者が知り得た限りの碑文で作業実施期間を想定すると、三月の田布施からはじまり九月までの間に各地の墓所で作業が完成しており、史料にある二月時点での作業着手は自ずと想像できよう。記銘されている人物について注目したい。石工主取池田善八、石工木村貞助、櫻井吉之助、上村吉之助の四名は、伊集院と郡山の二カ所に記銘が残されており、同一工人による施工事例という可能性が高い。石工池田善八や石工かは不明であるが、新保金之助、鍋倉源太郎、池田彦次郎、新保権兵衛らは薩摩川内市の島津師久墓（改葬福昌寺跡）でも見られる。石工頭である山口角次郎も、立久墓、丹後の局墓及び茶毘所、忠良夫人墓でも確認でき、貴久夫人墓では判読が難しい部分もあるが、おそらく同一人物であろう。また、石工であるか不明だが、和田正章・西田恒行の両名は、忠良夫人墓・貴久夫人墓・丹後の局墓及び茶毘所で確認する事が出来る。吹上郷土史によると、「明治八年島津家々扶中原長右衛門は石工を伴い来り多宝寺、天徳寺、善勝寺、法水山西福寺の各墓を修理した」とあり（吹上町一九七四）、石工は郷外から派遣されたために、各地で同一人物名を確認する事が出来るのではと考えられる。移設後の姿としての多宝寺跡と天徳寺跡に残されている手水鉢で見ると、広い四面と狭い四面とが交互に展開するという特徴が類似しており、同一集団による製作の可能性も十分に考えられる。いずれにせよ、当該期の職人集団に関しては不明な点も多く、実像に迫る事の出来る事例として指摘することが出来よう。なお、和田正章、西田恒行、山口角次郎の三名は、同一石造物への記銘が多く、さらに言うなれば、墓碑に近い燈籠への記銘が多い傾向がうかがえ、集団の中での位置付けとどのような関連があるのか、注意しておきたい。

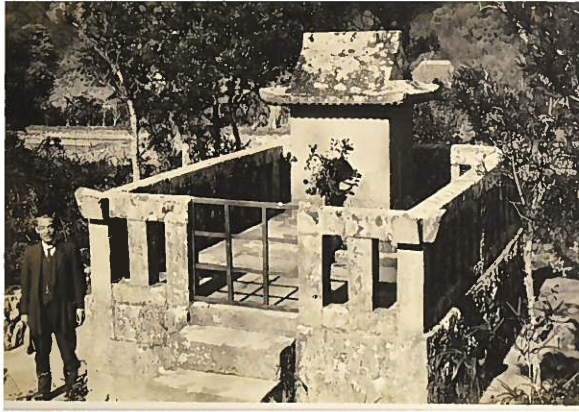
最後に、墓守について若干述べておきたい。玉里島津家資料の文中にあるように、各地の墓所には墓守が存在していた。先に紹介した竜雲寺跡図面（第六図⑦）は、明治二十九年四月二日とあり、この図は市来御塚守白井常盛が記録している。この人物の詳細は不明だが、手水鉢に記銘されている一人に白井常明の名があり、両者は縁者の可能性もある。この墓所は、昭和三年に改葬されており、この段階までは墓守によって維持管理されていたと思われる。

以上、作業実態について考察してきたが、石工による施工の指揮系統が連続するのか、地元工人がどのように関わったのか、はたして、石造物は集合させたのか、そもそも原位置との関係はどうなっているのか等、様々な課題も浮き彫りになった。冒頭でも述べたように、各地の墓所を評価する上で、後世の改修履歴は、墓所造営時の空間認識や配置・構成といった全体像を探る上で極めて基本的かつ重要な要素として把握すべき事項であると考えられる<sup>54</sup>。加えて、同一工人の名前が複数箇所確認されたことで、これまで不明であった当時の石工集団を探る上でも重要であると言えよう。この点は、周辺の石造物も含め、更なる調査により明らかにしていく必要がある。

#### おわりに

黎明館所蔵の玉里島津家資料の中に一枚の写真がある。「梅窓院墓所写真（伊作麓）」と登録されているこの写真は、写っている風景から昭和十四（一九三九）年の改葬前の写真と思われる。今では知りうることの少ない改葬前の姿を伝える貴重な資料と言えるであろう。これは、写真が墓所や石造物などにとって有効な記録であることも示している<sup>55</sup>。

さて、明治八年以降、各地の島津本宗家関連墓は福昌寺跡へ順次改葬されていくこととなる。具体的には、大正十三（一九二四）年から昭和三（一九二八）



第7図 「梅窓院墓所写真」(黎明館蔵 玉里島津家資料) :  
写真上と現在の梅窓院墓 : 写真下

と、昭和四十年代から五十年代の二時期に集中して改葬が行われているようにある。明治八年に現地で改修されたものも例外ではなく、時代と共に移ろう祭祀の在り方として記憶しておきたい。

小稿執筆中、県内各地に残る島津家墓所が国史跡へ答申された。関係諸氏の努力に敬意を払うとともに、これを一つの契機として、大名墓を頂点としつつも、各地に残されている様々な階層の墓所や墓石、石造物を再評価するきっかけとしなければいけない。今回は、筆者が現地踏査した限りでの作業であり、史料解釈も仮説の域を出していない。引き続き調査を進めると共に、より精進してこれらの実態解明に努めていきたい。

小稿を執筆するにあたり、尚古集成館館長松尾千歳氏と福元啓介氏には、資料閲覧と掲載についてご快諾いただいた。島津家墓所担当者会においては、関係諸氏から多くの示唆を得ることが出来た。この時の議論が小稿執筆の原動力でもあった。また、黎明館職員はじめ、多くの方々から日々ご教示を得ている。末筆であるが名を記し感謝申し上げたい。

有川孝行 市村哲二 小倉浩明 小林善仁 崎山健文 常田和彦 中摩浩太郎  
羽生文彦 春山直人 深野信之 藤井大祐 松原典明

## 註

(1) 碑文では亥を他の表記で刻む事例もあるが、ここでは便宜上乙亥で揃えている。

(2) 第一墓地と第二墓地という表現は、吹上郷土史(吹上町一九七四)にあり、これを用いた。

(3) 例えば『御祭祀提要』もそのうちの一冊となるが、下書きとも各地からの提出図面ともとれる絵図面類が各墓所ごとに複数枚保管されている。

(4) 一つの可能性として、於平墓を事例としたい。この墓所は、基壇と石柵で区画された内に宝篋印塔の墓碑がある。ここには、小稿で取り上げた燈籠や手水鉢といった石造物は見当たらない。だが、元々両者を有しないのか、あるいは消失してしまったのか不明であるが、そもそも両者を有しない補修もあったのではないだろうか。即ち、当初は宝篋印塔のみが存在しており、後世において基壇と石柵で区画されたとも想定できるのである。

推測の域を出ないが、この視点に立って、中世から近世初期の島津家墓所を改めて考察する必要性を感じている。

(5) さつま町宮之城島津家墓所(宗功寺墓地)の調査報告では、「宮之城島津家墓所の今と昔」として大正・昭和の写真と現在とを比較している。

#### 引用・参考文献

- 小倉浩明編『宮之城島津家墓所(宗功寺墓地)調査報告書』さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書(一一)(さつま町教育委員会、二〇一九年)
- 鹿児島県『鹿児島県史料 玉里島津家史料八』(鹿児島県、一九九九年)
- 栗林文夫「島津重豪の信仰と宗教政策」『島津重豪と薩摩の学問・文化 近世後期博物大名の視野と実践』勉強出版、二〇一五年)
- 島津顕彰会『島津歴代略記』(島津顕彰会、一九八五年)
- 田村省三「御祭祀提要」『尚古集成館紀要』第五号、一九九一年)
- 中摩浩太郎編『今和泉島津家墓地埋蔵文化財発掘調査報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第六二集(指宿市教育委員会、二〇一九)
- 平田信芳『石の鹿児島』(南日本新聞出版センター、一九九五年)
- 深野信之編『始良市島津家墓所調査報告書』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書(八)(始良市教育委員会、二〇一九年)
- 吹上町『吹上郷土史』下巻(吹上町、一九七四年)
- 藤井祐大編『薩摩藩主島津家墓所(福昌寺跡)調査報告書』鹿児島市教育委員会 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(八〇)(鹿児島市教育委員会、二〇一七年)
- 南九州石塔研究会『鹿児島県の石塔図録』(南九州石塔研究会、二〇一四年)

(くろかわ ただひろ 本館学芸課専門員)